

新疆バイリンガル教育の興隆について：ウイグル社会を中心に

アナトラ, グリジャナティ
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：修士課程2年

<https://doi.org/10.15017/7374732>

出版情報：国際教育文化研究. 5, pp.117-127, 2005-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



新疆バイリンガル教育の興隆について ーウイグル社会を中心にー

グリジャナティ・アナトラ

はじめに

中国のバイリンガル(双語)教育は、共通(標準)言語(以下中国語と表記)⁽¹⁾ および共通文化の習得を促進し、同時に民族言語・民族文化を維持していくという目的で、70年代の後半から始まり、80年代に特に盛んになった。しかし、バイリンガル教育への対応の仕方は各民族集団によって様々であるため、民族言語と中国語を併用するバイリンガル化は、一部の民族の間では実現されつつあるが、多くの民族の間ではいまだに母語のみを中心とするモノリンガル現象が一般的である⁽²⁾。

新疆では、50年代中期より少数のウイグル族の親たちの間で子供を漢族の学校に通わせる現象が現れ、政府も少数民族児童が中国語を勉強し、漢族学校に入学することを奨励した。そして、大学入試での合格者の選抜においても、中国語で入試を受けた少数民族学生を優遇し、もし漢族学生と同等な成績であれば、少数民族学生を優先的に選抜し、さらに選抜基準を適宜引き上げるといったことも行ったのである。このように中国語で大学入試を受けた少数民族学生は、「民考漢」と呼ばれ、自らの母語で入試を受けた学生は「民考民」と呼ばれていた。ただ、当時「民考漢」はまだそれほど多くはなかった。

その後、1980年代に打ち出された改革開放政策にしたがって、人々の意識が変化し、自分の子どもに少しでも中国語を学ばせようとする親が増えている。現在、新疆各地の「民漢学校」⁽³⁾の漢族クラスは生徒数が多すぎて、校舎や教師が不足している。例えば、カシュガル市インジサ県(英吉沙)A小学校では、少数民族児童が70%に達しており、タシコルガン(塔什庫爾干)県の小学校も同じような状況である。ミンフオン(民丰)県A中学校の附属小学校の「学前班」⁽⁴⁾では全クラス30人余りの児童のうち、3分の2が少数民族である。また、2年生の1クラスでは、42名中21名が少数民族である。

本稿では、改革開放や西部大開発政策の影響を受け、新しい時代を迎えようとしている新疆ウイグルのバイリンガル教育の現状をウルムチ、トルファン、コルラ、カシュガルなどの地域で行った筆者の調査資料を参考に紹介する。

I. 新疆における多言語現象の歴史

新疆は古くから民族文化融合の大舞台であった。世界四大文明のエジプト文明、メソポタミヤ文明、インドス文明、黄河文明がここで出会い、世界三大語族であるシナ・チベット語族、アルタイ語族、インド・ヨーロッパ語族もここで交流してきた。世界三大宗教の仏教、イスラム教、キリスト教もこの地に共存している。紀元後一千年の間、タリム盆地には「文化レベルがかなり高く、異なった言語を操り、一般に眼

が窪み、鼻が高いいくつかの民族集団が居住していた」。従って「異言語の交流は歴史の必然」であった（耿世明 1987：264）。バイリンガル状況は異言語の交流過程で生み出される。異民族間の結婚や翻訳活動及び政治経済に関する活動は、バイリンガルを大量に生み出す。張洋（2000）によれば、前漢と後漢（東漢と西漢）から南北朝の間、新疆地域のバイリンガルの主流は、シナ・チベット語族とインド・ヨーロッパ語族間のバイリンガルであった。隋、唐代になると、チュルク言語を操る諸民族がしだいに勢力を強大化するに伴いインド・ヨーロッパ語族、シナ・チベット語族、アルタイ語族など三大語族の言語は、短期的に鼎立構造を形成した。新疆のチュルク化過程において、インド・ヨーロッパ語族言語とアルタイ語族の言語の間では交錯や衝突があった。その過程で、アルタイ語族の言語が勢力を増し衰退化しつつあったインド・ヨーロッパ語族言語を融合した。さらに、元、明、清代には、新疆のバイリンガルはシナ・チベット語族とアルタイ語族を主としていた。

新疆の各民族集団は、古くからこの開放的な文化的雰囲気の中で子孫繁栄を図り、生活し、生産を行ってきた。その結果、多文化のエッセンスを貪欲に吸収し自己の文化をますます豊かにしていった。まず、漢民族の農耕文化と少数民族の遊牧文化がしばしばお互いの文化を取り込んだ。言語は文化のキャリアー、または文化の活きた化石であり、文化交流の歴史的過程とその痕跡は、新疆の民族言語に深く浸透している。そして西域文化の開放的流れは新疆の言語状況に大きな影響を与え、バイリンガルやマルチリンガル現象となって表れた。新疆の各民族集団のバイリンガル能力とバイリンガル化への意欲は、長い歴史を持っている。このような多言語使用の能力と意欲は、人々の物質・精神生活の中で数千年来衰退することなく重要な役割を果たしてきており、新疆の各民族集団における一種の精神威信、或いは潜在能力を形成している。

このような威信や能力は、民族文化がぶつかり合い、ひとつの大潮流となるたびに呼びおこされ、反響をひきおこし、顕在化してきた。隋唐時代の文化合流における大潮流では、新疆をして「華門將軍善胡歌、葉河藩王能漢語」（華門將軍が胡の歌を歌うのが得意、葉河の藩王様は漢語ができる）と言わしめた。また明清時期の文化的大合流では、バイリンガル状況の空間的な広がりや階層的深まりが同時に実現された。空間的な広がりや「山童・跣作胡舞、野老釣輞能漢言」（山のわらべが拙い胡の踊りを踊り、村の老人が鳥がさえずるように漢語ができる）ということわざとして表現され、階層的な深まりについては、一部の少数民族上層部の人々が漢族の職員と公務の話をするとき、「国都音」（中国語）を使うことができたという記録に表れている（張岱年 1994：115、221）。

II. 西部大開発と新疆バイリンガル教育

現在、経済のグローバル化、科学技術の統合化、文化の多元化という大潮流が全世界を席卷している。中国の経済は目を見張るスピードで発展している。西部大開発は、新疆の発展にチャンスを与え、また新疆各民族集団のバイリンガルへの潜在能力を呼び醒まし、人々のバイリンガル化への意欲を呼び起こしつつある。そして、それは学校、家庭、組織、工場、鉱山など、社会全体で新疆バイリンガル教育の興隆を生み出しているように思われる。

1980年代に、鄧小平の強力な指導によって行われた改革開放は、結果として内陸少数民族地域と沿海地域との経済格差を拡大することになった。これを背景に1999年西部大開発が打ち出され、2000年に新疆ウ

イグル自治区、チベット自治区、内モンゴル自治区など多くの少数民族地域において様々なプロジェクトが始動した。

西部大開発では、それを担う人材養成が何よりも重要である。人々の素質を高め、インフラ設備を進め、情報へのアクセスを容易にすることは、古い考え方や意識を転換するための重要な手段である。市場経済は、人材の成長と流動を刺激する。そして、新疆の人材養成、人材流動などは、いずれもバイリンガル化と密接な関係がある。バイリンガル化は新疆の情報化の促進の前提条件であるし、市場経済もまた、バイリンガルの興隆を推進する原動力のひとつである。

バイリンガル教育と情報化

情報化は、世界経済と社会発展の基礎である。西部大開発では、何よりもまず情報技術の支援が必要となる。情報が国民経済の発展を動かし、推し進める。情報化の推進は、経済発展の必然的な未来図である。多民族が共存し、多言語が混ざり合っている新疆の社会環境の中で、バイリンガルやマルチリンガルの人材は、言語、民族、地域の境界を越え、人々との交流、コミュニケーションなどを飛躍的に向上させ、また、誰よりも早く各種の情報を手に入れることで、新疆、中国さらに世界における自己の有利な位置を定めることができる。けれどもバイリンガルやマルチリンガルだからといって現代社会への適応が保障されるわけではない。すなわち、多言語の獲得に加えて更に他の技術も身に付ける必要がある。

現在、新疆では、地下光ケーブル、地上デジタルマイクロ波通信幹線、空中衛星通信網などを含めた三層立体通信システムが設備されつつある。しかし、人々の情報技術への適応はまだ充分ではない。現代化された道路、鉄道、ばかりではなく情報化時代に適応する人材の育成が推進されなければならない。情報高速路を建設するキーポイントとなるのは人材である。そして、それはバイリンガル化とも深く関連している。

市場経済とバイリンガル教育

改革開放以降、市場経済は中国人の間に仕事や起業への意欲や積極性を引き出した。また市場経済は仕事の種類の増加や複雑化をもたらした。以前は、軍人、農民、労働者、商人などいくつかの職業範疇が存在するだけだった。市場経済下においては、司会者、カウンセラー、競売人、美容師、マッサージ技師、経営コンサルタント、統計師、研究館員、編集者、翻訳者など大量の職業が新たに作り出された。近年、就職市場の競争は非常に激しいものがある。2001年の年末には自治区の大学、専門学校、短大の卒業生合わせて15万人が無職だった⁽⁵⁾。就職市場における彼/彼女らの競争力は未だに弱い。市場経済の条件下で弱い位置にある主な原因のひとつは、彼/彼女らの大部分がモノリンガルであるということだ。彼/彼女らの大部分にとって、モノリンガルであることは、先進的科学技术情報を収集し、先進的科学技术を掌握する力に大きく影響している。したがって、雇用条件が比較的によい企業、事業単位、例えば、外資系企業、合弁企業、国家機関、或いは個人企業等の職員募集では、バイリンガル或いはマルチリンガルであることがひとつの条件となっている。「ウイグル語と中国語ができる薬剤師を募集しています」などのように求人広告のなかには言語に関わる条件を直接掲げたものもある。普通のレストランの従業員、或いは商店の営業員にしても、バイリンガルを募集して、各民族の顧客に対応させたいと考えている。どの親も自分の子どもが、衣食に不自由せず、富かに暮らせるように希望している。バイリンガルなら、就職にも有利で、

就職後の給与水準も高い。それに従い、社会的にも有利になる。庶民は実益を重視する。市場経済は新疆の人々に対しバイリンガルのいろいろな場面での優勢を目撃させることになった。こうして、バイリンガル教育への動機づけは急激に高まりつつあり、しかも、その勢いはますます増している。

Ⅲ. 新疆バイリンガル教育の現状

1. 新疆ウイグルにおけるバイリンガル教育

中国では、少数民族に対してふたつのタイプのバイリンガル教育が行われている。ひとつは、民族言語を教授言語とし、共通言語の中国語を教科として学習するタイプ、もうひとつは、中国語を教授言語として、民族言語を教科として学習するタイプである（趙恒烈 1988 : 293）。中国語と民族言語のどちらを教授言語にするかは、原則として、各民族自治区域がそれぞれ地域の言語環境や人々の希望にもとづいて決めることになっている。

法制面から見ていくと、「中華人民共和国憲法」における民族およびその言語に関しては、第4条、第119条、第121条に触れられている。そのうちの、第4条では次のように規定されている。「国家は、それぞれの少数民族の特徴および必要にもとづき、少数民族区域の経済および文化の発展が速まるように援助する。少数民族の集居している地域では、区域自治を実施し、自治機関を設け、自治権を行使する。いずれの民族自治区域も、すべて中華人民共和国の切り離すことのできない一部である。いずれの民族も、自民族の言語・文字を使用し発展させる自由を有し、従来の風俗習慣を保持または改革する自由を有する」。また、「中華人民共和国民族区域自治法」（1984）第36条には「民族自治区域の自治機関は、国の教育方針にもとづく、法律の規定にしたがって、その地域の教育計画、各級の各種の学校設置、学制、学校運営方式、教育内容、教授言語および学制募集方式を決定する」と規定されている（中国基本法令集 1988 : P6, 39）。つまり、少なくとも法理規定のうえでは、少数民族文化が尊重され、民族自治区域の自治機関の学校での教授言語決定権が保障されているのである。

新疆のバイリンガル教育は、新中国成立後のひとつの教育モデルとして正式に確立され、小学校から大学まで一貫した形態、先ほどの分類で言えばひとつめのタイプが採用されている。つまり、民族学校（民漢学校の民族クラスも含む）を中心に民族言語を教授言語とし、中国語をひとつの科目とした少数民族教育である。

1950年代の始め、各民族学校においては、民族言語で授業を行うと同時に、中国語はひとつの科目として設けられ、理工系、医学院などの高等学校では専門知識のみが中国語で教えられた（張貴亭 1999 : 3）。1964年、さらなるバイリンガル教育改革実験を始めたが、文化大革命の影響で中断された。1980年代から、政府は少数民族に対し、小学校三年生から中国語を勉強し、高校卒業時まで「民漢兼通」⁽⁶⁾の達成を目標にするように指示した。しかし、各地方での実施形態は学校環境によって異なっているため、すべての地方において高校卒業までに民漢兼通レベルを達成することはできなかった。当時、「普通学校」⁽⁷⁾に通うウイグル人が全体的に少なく、またウイグル人社会においては共通言語である中国語の価値もまだあまり認識されていなかったためである。しかし、社会主義市場経済の導入という大きな改革によって、特に90年代に入ってから急激な社会変化にともなって、先進科学技術を学ぶためには漢語が重要であるという認識がウイグル人の間で一般化してきた。人々のバイリンガルへの意欲や、バイリンガル教育への要求が次

第に急速に高まりつつあるのだ。

2. バイリンガル実験クラス

90 年代の半ばから、民族教育の資質を高めていくという目的で、民族学校において理科系の授業は中国語で行い、人文系の授業は民族言語で行うというバイリンガル教育の試みが実験的に実施されている。民族言語による教育が尊重されても、その後の社会的地位や役割が保障されなければ、民族教育を受けている者にとって卒業後の就職が大変難しく、将来に対する不安が解決できないという理由にもとづいている。ウルムチ市では子どもの教育に関してバイリンガルを選択する傾向が現れている。1997 年には、新疆の 16 の地区、州、市などでバイリンガル実践クラスが 60 校設けられ、生徒数は 2640 人に達成し、それは 5 年前より 20 倍に増加した（中国教育年鑑 1998：869）。

現在、新疆の各地域、州、県の都市や農村では、実情に合わせて、幼稚園、小・中・高校でバイリンガル実験クラスを設け、バイリンガルの教師による授業が行われている。また普通学校や民族学校もバイリンガル実験クラスを設けている。ホータン地区では、バイリンガル実験クラスが 37 校あり、バイングロンモンゴル（巴音郭楞蒙古）自治州では 53 校ある。小学校の実験クラスでは数学の授業を中国語で教え、中学校と高校では、数学、物理、化学、生物学などの科目を中国語で教えている。各地域の実験クラスは超満員で、保護者の中には不正な手段をつかって子どもを実験クラスに入れようとする者もいる程である。

3. 「民漢合校」によるバイリンガル教育の展開

ウイグル族は、古くから独自の言語や固有の文字を持ち、長い歴史過程のなかで独自の教育制度を形成し、それは初等教育から高等教育にまでおよんでいた。新中国成立後は、近代的国民学校に変わり、中国政府による少数民族教育が実施され、民族言語による近代的学校教育が実現した。表 2 からわかるように従来、学校形態は、初・中等段階から中国語系の普通学校、民族語系の民族学校、学校内に漢語クラスと民族語クラスが併設されている民漢学校の三種類存在しており、そのうち民漢学校は小・中・高等学校総数の 6.7%、8.7%、2.4%しかない。しかも、民族クラスと漢族クラスは基本的にそれぞれ独自に運営され、それぞれの独立性が比較的保持されてきた。しかし、2000 年のはじめから、少数民族学生のバイリンガル化に有益な言語環境をつくろうという目的で、普通学校と民族学校の二校を合併し、ひとりの校長により管理運営される「民漢合校」プロジェクトが推進されている。

表 2 言語別学校分類（1995 年）

		小学校	中学校	高等学校
学校総数		7,117	1,244	586
漢語系	学校数	1,947	541	333
	%	27.4	43.5	56.8
ウイグル語系	学校数	3,733	447	166
	%	52.5	35.9	28.3
民族漢語併列系	学校数	477	76	14

	%	6.7	8.7	2.4
ウイグル語学校	人数	1,140,172	227,040	33,114
	%	54.1	38.8	24.0

(リズワン 1999 : 167)

「民漢合校」政策は、西部大開発を背景として登場し、新疆全体の発展戦略の重要な一部となっている。

「民漢合校」の重点目標は、少数民族学生中国語レベルを高めることである。教育関係者の間には、「民漢合校」を評価する人々もいるが、一部には、バイリンガル教育の質は保証し難いという認識もある。しかし、姜によれば「民漢合校」により一部では、相互の利点を提供、調整することによって、民族学校で長い間解決できなかった学校設備の問題や資源不足等の困難が改善された。また、コルラ（庫勒）市の「民漢合校」では、理科系の科目を中国語で行い、人文系の科目は少数民族の母語で行っている。当市はこのような教学モデルを次第に普及させることによって、少数民族学生中国語レベルを高め、彼らが豊富な中国語資料、文献、情報等を迅速に読解し活用できるよう計画している（姜英敏 2002 : 17）。

2004 年 8 月筆者が行った調査によると、バイングロンモンゴル（巴音郭楞蒙古）自治州では、「民漢合校」は全部で 176 校、・台県だけで 12 校あった⁽⁸⁾。合校後、各教科担当教員は、担当科目ごとに授業準備を実行した。これにより、教学の質、バイリンガル教育のスキル、教師と学生の意識が大きく向上し、民族の団結も明らかに強化されたという。しかし、現状では、実質的に「民漢合校」となっている学校もあれば、形式上の「民漢合校」（学校名だけが合校）も存在している。「民漢合校」に対しての評価も地域によって異なっている。ウルムチ市では、「民漢合校」後、学校管理、生活習慣の違いなどでトラブルが発生し、あまり歓迎されていないような印象を受けたが、南新疆では、逆に教師の待遇や学校設備などが改善され、バイリンガル教育にも有益な言語環境ができたという評価も聞かれた。

普通学校と民族学校が併存している全ての地域で「民漢合校」が広がりつつある今日、それが少数民族学生中国語レベルを高めることに有利であるというプラスの面と同時に、中国の伝統遺産でもある少数民族言語および伝統文化の持続と衝突するというマイナス面の存在にも注目しなければならない。

IV. 新疆バイリンガルのその他の側面

1. バイリンガルの促進要因としての「HSK」

「HSK」（中国漢語水平試験）は、中国の国家レベルの試験であり、中国語が母語ではない者の中国語レベルを検定するために設けられた標準化言語試験である。国家教育委員会は、1997 年「少数民族学校における中国漢語水平試験を普及する通知」を出し、1998 年から新疆、内蒙古、青海、吉林、延辺朝鮮族自治州などの地域を 2 年間の試験地域として定めた（陳潮華 1999 : 48）。

筆者が以前働いていた新疆工学院（2001 年に新疆大学と合併した）では 1995 年 9 月から「HSK」が実施された。少数民族の新入生たちは、入学後、専門によって 1 年或いは 2 年間かけて中国語を勉強し、「HSK」の 4 級に合格したあとで専門の勉強に入ることができる。不合格者は留年となりもう 1 年間中国語を勉強し再度「HSK」を受けるが、再び不合格となると退学させられる。現在「HSK」は新疆の各地に広く普及し、小・中学生も受験している。公務員や各資格試験などでも「HSK」は要求されているし、少数民族の教師に対してはもっと厳しく要求されている。小学校では 6 級以上、中学校と高等学校では 7 級以上、大学では

8級以上、中国語を専門にしているものは上級の12級に合格することが求められている。このように「HSK」の普及は、新疆のバイリンガル教育を促進するひとつの要因となっている。

2. 「内地新疆高校班」

2000年9月から、北京、上海、天津など12の都市部で中等段階の普通学校の中に「内地新疆高校班」が設けられた。「内地新疆高校班」は、中央政府の西部大開発と新疆発展を支え、有用な人材の養成を促進するための重要な教育的措置である。募集対象となる学生は各地域の学校の優秀な学生であり、80%が農民や牧民の子女である。毎年1000人募集し、全日制方式、四年制で一年は予科である。国家財政局は、「内地新疆高校班」の学校経営のため8750万元を投資し、第一回目の「内地新疆高校班」に対して450万元を出費した（新疆年鑑 2001：278）。

「内地新疆高校班」を設ける目的は、優秀だが経済的な問題で進学できない学生を支援したり、また南新疆などバイリンガル教育に不適であると考えられる地域の学生のバイリンガル能力を向上させるためである。これにより、バイリンガル教育の地域格差の縮小も目指されている。

少数民族の保護者や生徒は皆、内地の高校で学ぶことに憧れている。「内地の新疆高校班」は、大学入試より難しく人数制限が厳しい。この4年の間、「内地新疆高校班」の定員を各地区や州で大幅に増やしてきたが、なおすべての要望はかなえられていない。このため現在各地区や州は、「内地新疆高校班」の定員増や修学期間の延長を要求している。

3. 日常生活でのバイリンガル現象

ウイグル語に中国語を混ぜながらコミュニケーションをとるという十年前ぐらい前に若者の間で流行っていた「混合語」現象が、現在、大人や年寄りにまで広まっている。電気製品や時代の新製品など、本来ウイグルの文化にないものにたいしては、「新疆ウイグル自治区言語文字委員会」がそれらに当たるウイグル語をつくっている。にもかかわらず一般のウイグル人は、もとの中国語をそのまま使っている。特に、電気製品や国家機関の名称に関しては漢語を当てるのが普通になっている。さらに不思議なことに、一般に数字に対しては母語を用いる方が容易と思われるが、現在、ウイグル人に電話番号を尋ねると中国語があまりできない人でも中国語で返事をする人が多い。

終わりに

経済発展・社会変化が急速に進んでいる今日、中国語はウイグル人社会を巻き込みながら勢力を拡大しつつある。それにしたがって人々の価値観も多様化しつつある。ここで興味深いのは、子どもの教育方法を決める親の反応である。親の中には、子どもの将来を考え、母語であるウイグル語は役に立たないと思いつく人も多くなり、その結果、子どもを中国語を中心とする普通学校に通わせる人が増えてきている。しかし、普通学校では、全ての科目の授業を中国語で行い、第二言語は英語を教えるところが多い。普通学校に在籍している少数民族学生のための母語教育はカリキュラム化されていないため、学生の母語レベルは、「会話型バイリンガル」程度で、読み書きは中国語しかできないという報告もある（中島1998：10）。一方、民族学校に通っている学生の場合にも、国語と母語の聞く・話す・読む・書く等の4領域がそろった「読み書き型バイリンガル」、すなわち「民漢兼通」を達成する上で言語環境や地域による格差が生じて

いる（同書）。このような状況のなか、新疆教育庁は、ウルムチ、カルマイ、コルラなど漢民族が多く居住し、中国語環境が整った大・中都市部では2006年前後をめぐりにすべての学校を対象に中国語での教育を実行する予定である。北新疆と東新疆の県・町および南新疆のアクス市、カシュガル市、アトシ市では、2011年前後をめぐりにバイリンガル教育を実行し、他の地域では、2015年までに実行する予定になっている。

言語は人間相互のコミュニケーションの道具であるばかりではなく、民族の伝統文化のキャリアでもある。さらに「文化は存在しているだけではなく、創造されるものでもある」（藤山1999：53）。専門家によっては、これから一世紀の間に、今世界に存在している6000余りの言語の半分は使用されなくなると予想している。アメリカのサマー言語学学院が1999年に行った調査によると、世界でたった一人が使用している言語が51種類、100人満たない人が使われている言語は500種、一万人足らずの人が使用している言語が3000種余りあるという（黄張箏2000：20, 25）。

中国社会の経済的発展がもたらすマイナス効果の一つとして貴重な民族遺産である少数民族言語の消滅が考えられる。そうした危機からそれら言語を救うために、「民族地区自治法」における少数民族の言語や文字の保障に関する規定を十分に尊重し、少数言語に対するマイナス影響を最小限にとどめなければならない。民族言語と民族文化が保持できるように、バランスの取れたバイリンガル教育の適切な方法を検討することが必要である。

注

(1) 標準語は中国では「普通語」と呼ばれる。「普通話」とは北京の発音に基づき北方漢語方言を基礎とした共通語のことであるが、北京語は、中国の「普通語」と同じではない。それは、日本語の東京弁に相当する。

(2) 馬学良（1995）によると、四川彝族地区各県で中国語の漢字が1500字程度読める比率は、彝族全人口の2.4%だけで、新疆、西藏地域では、農村幹部レベルでようやく多少の中国語を用いることができる程度であるという。

(3) 「民漢学校」は、一つの学校に少数民族のクラスと漢族のクラスが同時に存在し、両者が比較的独立性を保持している学校である。少数民族のクラスと漢族のクラスの共通の活動は、毎週月曜日朝の「升旗儀式」と週末の「降旗儀式」、体操タイム、運動会など。教授、管理、課外活動などに関する運営はそれぞれ別の教員や管理者の手で行われる。

(4) 「学前班」は、小学校入学前の一年間の教育施設である。今の段階では幼児教育が比較的遅れている、または、学前3年間の教育が普及していない農村や小都市に設置され、それにより幼稚園の不足を補っていた。

(5) 西北少数民族研究中心の張洋先生の提供資料。

(6) 「民漢兼通」は、漢族と少数民族の言語を理解したうえで、漢族と少数民族の文化も熟知すること。

(7) 「普通学校」は、中国語を教授言語とする、一般学校を指摘している。

(8) バイニングロンモンゴル（巴音郭楞蒙古）自治州の総人口は105.67万人であり、モンゴル族は総人口の4.99%、ウイグル族は35.27%を占めている。本稿での「民漢合校」では、モンゴル族もわずかに入っ

ているが、ほとんどがウイグル族と漢族の合校を示している。

参考文献

日本語の文献

- 王 錫宏 1998「中国における少数民族教育の実態及びその課題」『東京大学大学院教育研究科紀要』
- 片山 隆裕 2003『民族共生への道』九州大学出版会
- 金 龍哲編訳 1998『中国少数民族教育政策文献集』大学教育出版社
- 江 藍生 「中国語における共通語の普及について」第1回 国立国語研究所国際シンポジウム報告書
1996『世界の国語研究所－言語問題の多様性をめぐって－』 国立国語研究所
- 張 瓊華 1998「中国における二言語教育と民族アイデンティティの形成－民族文化共生の視点から－」
『比較教育学研究』第24号
- 張 瓊華 1998「中国における二言語教育と生徒の進路意識」『東京大学大学院教育研究科紀要』
- 張 瓊華 2001「中国における二言語教育と少数民族集団の選択」『東京大学大学院教育研究科紀要』
- 趙 恒烈 1988「中国少数民族の現状と未来」斉藤秋男ほか編『教育のなかの民族』明石書店
- 地木拉提・奥万尔 1998「新疆の民考漢とカザフスタンの民考俄」『中国新疆及びカザフスタンにおける少数民族文化の持続と変容に関する基礎的研究』科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書（研究代表 丸山孝一）
- 中島 和子 1998『バイリンガル教育の方法 12歳までに親と教師ができること』アルク
- 藤山 正二郎 1999「ウイグル語の危機－アイデンティティの政治学－」『アジア遊学No.1』勉誠出版
- 丸山 孝一 1996「中国少数民族の文化と教育の諸問題」九州大学教育部付属比較教育文化研究施設『教育文化の比較研究－回顧と展望－』九州大学出版会
- 李 天国 2000『移動する新疆ウイグル人と中国社会－都市を結ぶダイナミズム－』ハーベスト社
- リズワン・アブリミティ 1999「模索するウイグル人－新疆における民族教育の状況－」『アジア遊学No.1』勉誠出版

中国語文献

- 陳 潮華 1999「民族中小学校漢語教学与国家漢語水平試験(HSK)」『新疆双語教育』1
- 陳 学迅 2001「双語－西部大開發的加速器」『言語与翻譯』3 『言語与翻譯』雜誌社
- 方 文 2002「中国少数民族漢語水平等級試験与新疆少数民族漢語教学」『新疆双語教育』1 新疆双語教育雜誌編集社
- 方 曉華 2002「第二言語習得理論与对少数民族漢語教育」『新疆双語教育』2 新疆双語教育雜誌編集社
- 高 莉琴 2002「西部大開發与新疆的言語問題」『言語与翻譯』1 『言語与翻譯』雜誌社
- 耿 世明 1987「試論新疆塔里木盆地民族的融和和近代維吾尔族的形成」 新疆歷史論文統集 ウルムチ新疆人民出版社
- 哈力克・尼牙孜 2000「从言語的社会功能認識“民漢兼通”」『新疆双語教育』1 新疆双語教育雜誌編集社
- 黃 長箏 2000「网络時代的言語競争」『文化生態学の思考』1 国外社会科学
- 姜 英敏 2002「民漢合校芻論」『民族教育研究』 1

-
- 劉 婷 / 成 金華 2002「情報技術与西部開發」 西部社会 1
- 馬 戎 2004『民族社会—社会学的族群關係研究』 北京大学出版社
- 馬 学良 1985「論双語と漢語教学」『中国少数民族双語研究論集』人民出版社
- 王 ・ 2000「西部文化的回声」 ウルムチ 新疆青少年出版社
- 新疆ウイグル自治区地方志編纂委員会編 2001『新疆年鑑—2001』新疆年鑑社
- 張 岱年 1994「中国文化概論」 北京師範大学出版社
- 張 洋 1999「双語与現代化」 新疆大学 (増刊)
- 張 洋 2000「古代新疆多言語種双語的流向」中国民族大学学报 2
- 張 貴亭 1999「加強漢語教学 培養双語人材」『新疆双語教育』1 新疆双語教育雜誌編集社
- 『中国教育年鑑』編集部編 1998『中国教育年鑑—1998』人民教育出版社

On the progress of Bilingual Education in Xinjiang
—Focusing on Uyghur Society—

Guljennet ANAYTULLA

Bilingual education in China started in the late 70s and gained full momentum in the 80s with the aim to encourage acquisition of common language and common culture, and to preserve ethnic languages and cultures at the same time. While bilingualization has been accepted by few ethnic groups, most ethnic groups still uses their native languages only and the native languages are used for means of communication in daily life. However, because of the rapid social changes, especially the major reform of introducing Socialism market economy, Uyghur people widely came to have a realization of the necessity to learn Chinese in order to study advanced science and technology. As a result, their eagerness to learn Chinese and needs for bilingual education grew rapidly, and then various project concerning bilingual education, for example, bilingual experimental classes, Uyghur-Han mixed schools, HSK and Uyghur schools in other provinces of China, were promoted.

In this paper, I trace the process of development of bilingual education in Xinjiang after the constitution of New China on the basis of the historical background of bilingual phenomena in ancient Xinjiang. In addition, I introduce the present state of bilingual education in Xinjiang on what I researched in Urumqi, Turpan, Corla and Kashgar, correlating with the Openness reforms, Western regions development projects and the advancement of the globalization.

Bilingual education is effective on the proficiency of Chinese for minority group students, but there are some negative impacts on a folk heritage, like a language of minority groups, and on their traditional cultures. In order to preserve the ethnic languages and cultures, it is necessary to develop proper methods of balanced bilingual education.